A Conceptualization of Quality of Life in Social Work

Mayuko Nagasawa

ABSTRACT

The concern with quality of life has been growing, and it has been studied in many research domains. This concept has been studied and implemented in social welfare as well. In this domain, quality of life has been treated merely as an idea or, on the other hand, it has been put into practice in order to improve quality of life without any clearly defined theoretical background. It is thus necessary to examine quality of life from the viewpoint of social work.

The purpose of this paper is to consider the conceptualization of quality of life in social work. The first chapter describes keywords in the concept of quality of life: multidimensional, person-environment system, temporality, evaluation, intrapersonal, social-normative, by Lawton. The second chapter examines concept about above six keywords in social work, and it defines quality of life in social work as follows. Quality of life in social work is multidimensional evaluation in time series, by collaboration with a client and social worker, of a life which consists of transaction of people and environment. The third chapter considers problems in the evaluation of quality of life in social work. The following issues are treated:

1. A life of a client must be understood systematically for multidimensional evaluation.
2. It is necessary to find a means to get to know the situation and evaluation of a life of a client.
3. We have to examine a means to grasp the change of a life situation and evaluation.
4. The evaluation of a life by collaborating with a client and social worker must be embodied.

There is "Ecosystems Project" to solve the above issues. "Ecosystems Project" is method which understands a life from system thinking and ecological view point, and is means of an understanding of a life using practice support tool which utilized the computer simulation. The next research subject of quality of life in social work is development of the practice support tool for grasping the quality of life.

〈論　文〉

ソーシャルワークにおける生活の質の概念化

長澤　真由子

Ⅰ　はじめに

生活の質（クオリティ・オブ・ライフ）は1960年代以降、医学や経済学、社会学など、多くの領域で関心が持たれ研究が行われている。社会福祉においても利用者の生活の質を向上させるための研究・実践が行われているが、生活の質の向上に向けた明確な方法がないまま、生活の質の向上が理念や形式として論じられたり、生活の質の向上を目的とした実践が行われているように思われる。このような状況において、社会福祉実践としてのソーシャルワークの視点から生活の質の概念をとらえ直し、ソーシャルワークにおける生活の質を向上させる理論と具体的方法を考察する必要があると考える。本稿では、以下の3点を通じて、ソーシャルワークにおける生活の質概念と、生活の質の向上を目指した実践の課題を考察してみたい。

① ロートン（Lawton, M. P.）による生活の質概念の考察

② ソーシャルワークとしての生活の質概念の把握

③ ソーシャルワークにおける生活の質評価の課題検討

最初に、ロートンの生活の質の定義における6つのキーワードを中心に生活の質の概念を考察する。ロートンの生活の質概念は、生活を包括的にとらえており、内容はロートンの研究領域である老年学の特殊性に限定されるものではなく、汎用性のある概念である。次に、ロートンにおける6つのキーワードをソーシャルワークの観点から考察し、ソーシャルワークにおける生活の質概念を明確にする。そして、そのソーシャルワークにおける生活の質概念を踏まえた、生活の質評価の方法を開発するための課題を検討する。

Ⅱ　生活の質の概念

1．生活の質のキーワード

「生活の質とは、個々人の過去、現在、未来における、人―環境システムに対しての、個人内的基準と社会―規範的基準に基づいた多次元的な評価である[1)]」。

この生活の質の定義は、アメリカの老年学研究者であるロートンによって高齢者の生活の質を研究する過程において設定されたものである。ロートンは自ら定義におけるキーワードとして①多次元的（multidimensional）、②評価（evaluation）、③個人内的基準（intrapersonal criteria）、④社

会—規範的基準（social-normative criteria）、⑤人—環境システム（person-environment system）、⑥時間性（temporality）の６つを挙げ、この６点から定義に解説を加えている[2)]。生活の質は、社会の仕組みとの関連で生活の質を研究する社会学や経済学などのマクロな視点から、人間のからだやこころを中心に生活の質を研究する医学や心理学などのミクロな視点まで、幅広い視点から研究が行われている。ロートンの定義にはそれらの生活の質に関する多くの研究、議論の要点が含まれている。

ロートンは、生活の質の評価は「多次元的」に行わなければならないと主張しているが、その背景には生活の全体像を包括的にとらえようとする姿勢が見られる。生活の質を向上させるための研究・実践領域における議論において生活の全体像をとらえようとすることは、それぞれの研究・実践領域における人間像と関連している。生活の全体をとらえようとすることは人間の生き方に触れることにもなり、生活全体をとらえる視点や方法には生活の質の向上を研究・実践している領域において人間をどのような存在として考えているかが表われる。そして生活全体をとらえるための多次元的視点をどこに置くのかという議論は、生活の質を把握する際に、生活がどのような要素によって成り立っていると考えるのかという具体的な議論へと展開されている。またロートンは、生活の質は「人—環境システム」において評価される事柄であるとし、その評価は過去・現在・未来を通じて行われるものとして、その「時間性」を強調している。これは生活の固有で複雑な広がりや動き、流れをどのようにとらえるのかという議論と関連する。これらのロートンの定義における「多次元」、「人—環境システム」、「時間性」は、生活の質における生活理解の課題に対する議論と関連している。

生活の質において生活理解と同様に重要となるのが、その測定・評価である。ロートンの定義における「評価」、「個人内的基準」、「社会—規範的基準」というキーワードは、生活の質の測定・評価と関連する。質という概念そのものが価値判断を含んだ概念であり、評価行為を伴う。ここで問題となるのが評価主体と評価基準である。ロートンは生活の質の評価においては、個人に内在する基準と社会—規範的基準の両側面からの評価が必要であるとしている。生活の質研究における評価方法については、生活を主観的に評価するか、客観的に評価するかという議論が多く見られる。この評価方法をめぐる議論は、生活の質を向上させる具体的方法の展開において、対象となる人間の主体性や実践方法の専門性に関わる肝心な議論である。

ロートンによる生活の質の定義は、高齢者の生活の質を研究する前提として設定されたものであるが、ロートンはこの定義を、包括的に生活の質の全範囲を包含しているものであるとしており[3)]、定義の根拠となる考察は高齢者の特殊性に限定されたものではない。また、定義における６点のキーワードは、生活の質の研究において議論されている重要な内容を表わすキーワードとなっている。この６つのキーワードを①生活理解に関連するもの：「多次元的」、「人—環境システム」、「時間性」と、②生活の質の評価に関連するもの：「評価」、「個人内的基準」、「社会—規範的基準」とに分類し、これらの２つの側面から、生活の質の概念を考察していきたい。

2．生活の理解

多次元的視点

ロートンは高齢者の生活の質の測定において、健康の概念を身体的健康などに限定して高齢者の生活の質を単一次元で議論する研究は生活の質を本質的にとらえられていないと批判し、生活の質を多次元的観点からとらえる必要を強調している[4]。ロートンは、生活そのものが多次元であることから生活の質の構造も多次元にならざるをえないとしているとしているが[5]、このことからもわかるように、生活の質を多次元的にとらえるという発想の背景には、生活を部分的にとらえるのではなく、全体的、包括的にとらえようとする姿勢が見られる。

リハビリテーションにおける生活の質（Quality of Life: QOL）においても、生活の全体を視野に入れることが生活の質を議論する大前提になっている。リハビリテーションにおけるQOL概念は、生活を全体的に見渡して、自立を可能にしようとする概念として登場した。上田敏はリハビリテーションとは全人的復権であり、それは日常生活動作（Activities of Daily Living: ADL）の自立だけではなくQOLの向上によって可能となるとしている。そしてQOLとは生活全体の質を高める概念であり、その構造は多次元に及ぶことを指摘している[6]。経済や医療など、他領域の生活の質研究においても、従来の専門的な単一の価値のみから人間をとらえるのではなく、人間や人間の営む生活の多面性が注目されるなかで、生活の質という概念が登場している。生活の質には概念登場の背景から必然的に生活の全体への視野が含まれており、その把握や測定には多次元的な視点が求められるのである。

ロートンは、生活の質には生活における多くの領域が関与することは認識されるようになっており、生活の質がどのような生活領域の組み合わせてとしてとらえるかが次に議論されるべき課題であるとしている[7]。ロートンは、生活の質の内容として、①身体的健康から社会的役割までを含む「行動に関する能力」(behavioral competence)、②「行動に関する能力」に対しての主観的な認識である「認識された生活の質」(perceived quality of life)、③満足度などで測定される「心理学的な幸福」(psychological well-being)、④物理的な環境と人的な環境を含む「客観的環境」(objective environment) を挙げている[8]。また、ロートンが生活の多次元的評価の例として挙げている世界保健機構（World Health Organization: WHO）のQOLの基本調査票は、①身体的領域、②心理的領域、③自立のレベル、④社会的関係、⑤生活圏の環境、⑥精神性・宗教・信条の6つの領域で構成されている[9]。このように、生活の質の多次元的評価が、生活を多くの領域からとらえることによって可能になるとすると、把握する生活領域に何を選択するのかが、生活の質を多次元的にとらえるための具体的な課題となる。

人と環境の交互作用

生活を全体的・包括的にとらえようとすると、生活の複雑な広がりとともにその複雑な動きをとらえることが課題となる。ロートンは「人―環境システム」の見方には自明の仮定があるとしている。それは①環境は人の幸福（well-being）に影響を与える。②人は環境に影響を及ぼす、つまり人は、自らで環境を選び、自らのニーズに環境を適合させる。③人と環境の関係は、動的・交互的

な過程をもつ人と環境とのシステムの問題である、という３点である[10]。

生活を人と環境の関係においてとらえようとする考えは、生活の質の定義を分類する方法にも見ることができる。荻原勝は欧米の生活の質の定義を整理・考察し、個人の意識や主観などに注目する立場と、環境に注目する立場とに分類している。そしてこれらの立場は対立するものではないとし、その理由として、社会的に暮らしやすい環境や制度が十分に整うことによって、生活への満足感や充足感が発生するという関係に人と環境があることを挙げ、生活の質における環境から人間への影響の重要性を示唆している[11]。

松本洸も同様に、生活の質の定義を生活者の意識を中心に考える立場と、生活者のおかれている環境状態で考える立場とに分類し、その関係を前者は生活への評価意識を直接扱おうとしたものであり、後者はその評価意識を引き起こした生活の場であるとして、環境が生活者の意識に影響を与えていると考えている[12]。

このように生活の質の研究において、生活の複雑な動きは、人と環境との関係から解明しようとされており、その関係において、人や環境のどちらかのみに焦点を当てるのではなく、両者の交互作用によってとらえようとされている。

生活の複雑な動きを人と環境の交互作用としてとらえるとする研究では、交互作用の仕組みをどのように理解するかに研究領域の特徴と専門性を見ることができる。生活を人と環境との交互作用としてとらえようとすると、交互作用の具体的な仕組みを、研究領域の専門性や研究の目的を反映した視点から解明することは、生活の質を向上させるための課題のひとつとなる。

時間性

ロートンは、自らが定義する生活の質における時間性（temporality）の観点は、生活の人と環境とからなるシステムの動的、漸進的な性質を強調するとしている[13]。これは人と環境の交互作用による生活の動きが連続することで、生活の流れが生み出されることを示している。

生活の質は、一時的なものではなく、現在という一瞬の積み重ねが作り出す生活の連続性のなかでとらえられなければならない。ロートンは、過去の生活の質は記憶として存在し、現在と将来の質の評価に組み込まれており、同様に将来への期待は、現在を条件づけるとして、生活の質の継続性を強調している[14]。連続して連なっていく現在の生活の質は、常に過去や未来に影響されているのである。森俊太は、自分が過去を振り返り、過去の思い出や解釈によりライフヒストリーを作り出す事、そして将来の夢や計画を描いたりすることは生きがいを構成する要素であるとしている[15]。

これは高齢者に限られたことではなく、人間の生活全体をとらえることが生活の質を把握する前提であるとするならば、現在の生活の把握には、過去の記憶や将来への思いが重要となることを示している。

３．生活の質の評価

評価

ロートンの生活の質における「評価」の観点は、生活のある局面において、望ましい状況か不快

な状況か（良いか悪いか、好きか嫌いか）の比較をともなうことを意味している[16]。「質」という概念そのものに、ものごとに対する価値判断が含まれているのである。

三重野卓は生活の質に関心がもたれた背景を考察するなかで、「『生活の質』は、『質』という点からも明らかなように、そもそも良いか、悪いかという道徳的価値判断を含意している。その意味から、この概念においては、「質」の観点からの評価が重要になるのである。」と述べて、生活の質の概念には生活への価値判断、評価が含まれることを指摘している[17]。

生活の質の概念に評価の観点が含まれるとすると、次に問題となるのが、評価の主体と、評価の基準である。生活の質の研究においては、生活の質の評価方法をめぐって、主観的評価か客観的評価かという議論がしばしば行われる。これは生活の質を評価する主体と基準をどこにおくのかという議論と関連する。

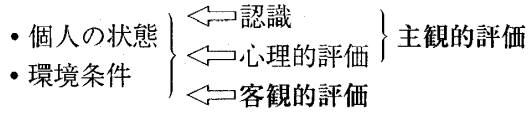
主観的・客観的評価の内容

ロートンは、前述したように、生活の質の内容として①「行動に関する能力」、「認識された生活の質」、③「心理的な幸福」、④「客観的環境」を挙げている。このうち、「行動に関する能力」と「客観的環境」は客観的に評価されるものであり、「認識された生活の質」と「心理的幸福」とが主観的に評価されるものとしている[18]。「行動に関する能力」には、身体的健康から日々の生活の過ごし方、社会的な役割などが含まれ、それらは社会―規範的に評価されるとしている。この「行動に関する能力」を自らがどのように認識しているかという主観的な視点から評価されたものが「認識された生活の質」である。そして、「客観的環境」には、家庭や、地域、社会的ネットワークが例として挙げられており、これらは物理的基準や、合意されている基準に基づいて評価されるものであるとしている。「心理的幸福」は「行動に関する能力」とそれに対する「認識された生活の質」との関連から発生し、精神的健康、満足度、などの指標によって評価されるとしている。

杉澤秀博は高齢者の生活の質を研究するなかで、客観的な生活の質として、身体的健康・精神的機能・社会経済的機能から把握される個人の状態と、物理的環境・他者との関係・社会環境などを含む環境条件とを挙げている。主観的な生活の質としては、高齢者の生活の質研究においては「幸福な老い」が重要なテーマであるとして、主観的幸福感を設定している[19]。

生活の質の評価方法の議論をふまえ、生活の質における主観的評価と客観的評価を整理すると図１のようになる。客観的評価は、心身の健康・経済状態・社会的役割などが含まれる個人の状態と、生活道具や住居などの物的環境や、家庭や制度などの社会的環境が含まれる環境条件を、数値化された平均や水準、あるいは、社会的合意にもとづく水準や規範などの客観的基準によって評価したものである。主観的評価には、個人の状態や環境条件に対しての生活主体の認識と、満足感、幸福感などの心理的評価が含まれる。この「認識」と「心理的評価」との違いは、認識は、個人の状態と環境条件を生活主体がどのように認識しているかであり、心理的評価は、満足感や幸福感といった、認識した状態を生活主体に内在する基準によって評価したものである。例えば、収入を多いあるいは少ないと思

図１　主観的評価と客観的評価の整理



っているかは「認識」であり、その収入に対して満足しているか、あるいは不満かは、心理的評価である。

主観的・客観的評価の意味

ロートンは主観的評価と客観的評価は併せて行われなければならないとしている[20]。生活の質研究において、主観的評価と客観的評価のどちらを用いるかは、研究領域の専門性や、研究の対象となる生活者の特徴によって意見が分かれるが、現在ではロートンのように、主観的評価と客観的評価の双方から生活の質をとらえるべきであるとする意見が多い[21]。

ロートンは、主観的評価と客観的評価との両方によって生活の質を把握するとき、まず生活者の主観が尊重されなければならないとしている。ロートンは、個人は生活に対する内面的な基準や価値を持っており、それには固有性があり、外部の基準に対して釈明する必要はないとし、自らの定義において「個人内的基準」による評価は重要な観点であるとしている[22]。フェルスとペリィ(Felce & Perry) も生活の質は客観的条件と主観的認識の双方によって構成されるとして、個人の価値観が尊重されることが生活の質評価においては大前提になるとして、その重要性を強調している[23]。

しかしフェルスとペリィは主観的評価の重要性を強調する一方で、生活の質を個人の満足だけで考えることはできないとしている。そして生活の質は、「生活のいろいろな側面における主観的な満足感が社会全体のなかで一般的に認められているものと一致、あるいは少なくともそれより劣るものであってはならない」としている。しかし、「満足の表出は、その人やその人たちのグループ独特の広く行われている生活条件に深く結びついてしまうこともある。たとえ、その人たちが、一般の人々における生活水準の分布上で、もっとも好ましくない条件のなかにいたとしても、その生活に慣れると満足を表明してしまう」場合があるとして、生活者の満足だけではなく、その生活者の生活条件が生活の質を左右する条件であり、それは主観的な価値だけでなく、なんらかの一般的な水準によって計られる必要があることを述べている[24]。

ロートンは主観的評価と客観的評価を同時に行われなければならない理由として、まず、「社会的計画、倫理の明確化、そして法律の原則が、人と環境の客観的質に対する判断をわれわれに求めている」ことを挙げている。そして「望ましく、有効な、あるいは健全である行動を構成する事柄についての社会規範 (social norms) なしで、積極的に集積された社会目標にむけた個人の社会化(socialization) のプロセスはない」として個人の社会化における社会規範の重要性を指摘している。また都市計画や制度の実施などのための基準なしに、多くの人に有益となる環境を整える方法はないとして、社会的なコンセンサスが生活の質において重要な役割を担っているとしている[25]。生活の質の評価において客観的評価が必要である２つ目の理由としてロートンは、障害を持つ人において、客観的な障害が重かったとしても、その人の主観的視点によって、自らの能力は高く評価されることがあるという例を示して、客観的評価が個々の認識の差異を知るための基準 (anchor point) となることを挙げている[26]。

このようなロートン、フェルスとペリィの主張にもみられるように、生活の主観的評価だけでは

生活の質をとらえているとはいえず、客観的な評価が生活の質の把握には必要である。しかしそれは、生活者の主観を尊重することが大前提であり、個人の認識や価値がないがしろにされ、個人が満足や幸福を感じることが考慮されずに、客観的評価の結果が向上しても、生活の質が向上したとはいえないのである。

Ⅲ　ソーシャルワークと生活の質

1．ソーシャルワークにおける生活

これまでロートンの生活の質の定義における6つのキーワードをめぐって、生活理解と生活への評価の側面から考察してきたが、ここでは6つのキーワードをソーシャルワークの視点から考察し、ソーシャルワークにおける生活の質の概念を検討したい。

生活全体への視野

ロートンの生活の質における多次元的視点の背景には、生活を部分的にとらえるのではなく、包括的に全体をとらえていこうとする姿勢があった。ソーシャルワークにおける生活全体への視野は、生活モデルの登場という1960年代からの実践理論の発展経緯に見ることができる。生活モデルは、病理（医学）モデルの批判や見直しが迫られるなかで登場した。病理モデルでは、検査―診断―治療という流れを重視し、問題やニーズは利用者個人のなかにあり、ソーシャルワークの機能を治療としてとらえる傾向があった。

生活モデルが登場した背景として①高密度に社会化・組織化された生活により、人間を環境から切り離して考えることが困難であること、②システム理論や生態学などの、生活の実体をとらえるための科学的方法が発達したこと、③行動科学の発達により、ソーシャルワーク実践理論やモデルが多様化・特殊分化し、その統合化が求められていたことが挙げられる[27]。生活モデルでは、人と環境から成る生活において、利用者の環境への適応能力を育成・強化することと、環境の応答性を高めることを目的とし、人と環境の交互作用の改善を行うことをソーシャルワークの機能とした。

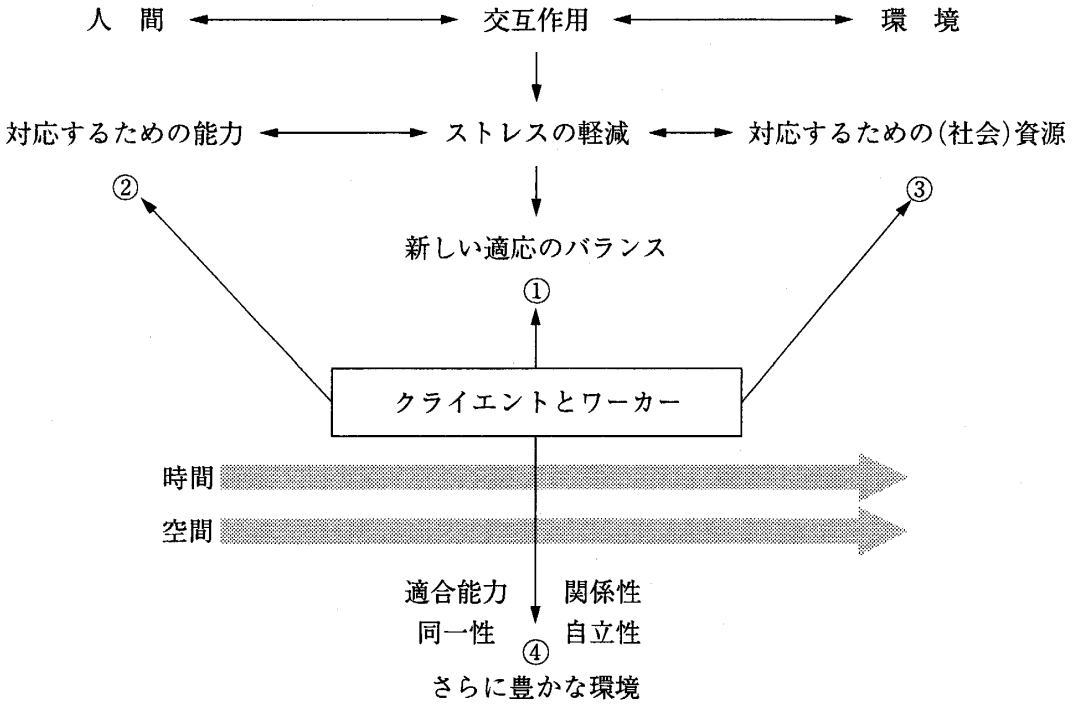
生活モデルの特徴は、①問題を病理としてとらえるのではなく、生活上での課題として積極的にとらえようとすること、②人と環境の交互作用に注目する生態学的視座を基点として生活をとらえていること、③パーソナリティの変革ではなく、環境への働きかけを重視していること、④個人の環境への適応能力などの能力の育成・強化を目指していること、⑤利用者固有の生活様式に合わせた支援を提供しようとしていることなどにある[28]。

このようにソーシャルワークにおける病理モデルから生活モデルへの移行には、パーソナリティに問題の原因を求める支援展開から、人と環境の交互作用として生活を理解して支援を行うという、生活を部分的にとらえる視野から、生活を全体的にとらえる視野への移行を見ることができる。

人と環境への視点

生活モデルの特徴のひとつとして、生態学的視座から人と環境に注目している点がある。生態学的視座を基点とした生活モデルに、ジャーメイン（Germain, C. B）が体系化した生活モデルがあ

図2　生活モデルの実践パラダイム[29)]



クライエントとワーカーは、②と③の働きかけを通して、①を生み出そうとする。
そのプロセスで、クライエントとワーカーは④を獲得する。

る。ジャーメインはそのモデルを図2のように示している。ジャーメインの生活モデルは①交互作用、②人間の特性、③環境の特質、の3点から説明される[30)]。生活モデルでは、それまでの医療モデルのように問題を個人の内面に求めるのではなく、人間と環境の不適切な交互作用にあると考え、人と環境の接触面に焦点をあて、人間の適応能力を育成・強化し、力と環境の応答性を増すことで問題の解決を図る。そして人間は、環境との交互作用において、適応能力、自律性、自己同一性、関係性の獲得を通じて、発達、成長するものであると考えられている。環境は利用者の問題解決の重要な資源であり、人間を成長させる栄養源あるとして、環境的滋養（environmental nutriments）を豊かにするための、ソーシャルワークにおける環境への働きかけの重要性がいわれている[31)]。このようにソーシャルワークでは、生活を人間と環境の交互作用からとらえ、その接触面に働きかけることで人間と環境の変容を促し、問題を解決しようとしている。

ソーシャルワークにおける時間

図2にも示されているように、ジャーメインは時間を生活モデルの重要な要素として位置づけている。ジャーメインは生態学的視座に基づいたソーシャルワークにおいて、時間はそれまでの病理モデルにおける直線的な時間とは対照的に、交互的な時間としてとらえられるとしている[32)]。病理モデルにおける直線的な時間では、過去に強い関心を示し、そのルーツを追いかけることよって現在が把握され、取り扱うことができると確信されていた。直線的な時間の把握では、過去は一連の現在を支配し、また未来を支配するという考え方となり、このことは、人間の革新・創造性・自由の要素を覆い隠しているとジャーメインは批判している[33)]。それに対して、生態学的視座に基づく

交互的な時間では、人と環境の交互作用に時間を見いだす。病理モデルに見られるように現在の結果を生み出した原因を求めて過去に遡るという行為に時間性を見いだすのではなく、「今起こっている表面上あるいは深層の機能に焦点が当てられる[34]」。つまり、現在起こっている人と環境の交互作用にその時間性を見いだすのである。ジャーメインの交互的な時間においては、人と環境が絡み合いながら繋がっていく変化のなかに過去・現在・未来があると考えられている。

人と環境の交互作用が生み出す変化に時間性を見いだすことは、ロートンの生活の質における時間に関する考えと一致する。しかし過去に遡り、過去からの視点で現在や未来をとらえようとすることを批判するジャーメインの時間性において、ロートンの「過去の生活の質は記憶として存在し、現在と将来の質の評価に組み込まれており、同様に将来への期待は、現在を条件づける[35]」という考え方は相容れないものではないだろうか。これは過去の記憶や将来への期待は現在に内包されているものであると考えることで、ジャーメインとロートンの時間性に一致を見ることできる。過去の記憶や将来への期待に注目することは、過去や未来によって現在を規定することではなく、現在の人と環境の交互作用の連続性のなかで過去や未来をとらえようとしていると考えることができる。

2．ソーシャルワークにおける生活の評価

実践過程における生活評価

生活の質を把握することは、質という概念に評価や価値判断という行為が含まれているため、生活を評価することである。ソーシャルワークにおいて生活を評価することはどのような意味があるのだろうか。ソーシャルワークの実践過程は①エンゲージメント、②アセスメント、③プランニング、④インターベンション、⑤モニタリング、⑥評価・終結という局面に区別される[36]。このなかで、アセスメント、モニタリング、評価・終結の３つの局面が生活への評価と関連する局面であると考える。ソーシャルワークの実践過程におけるアセスメント局面の機能は、利用者の生活情報を収集して、情報を支援過程において意味づけ、取捨選択することから問題や支援目標を認識し、プランニング、インターベンションへの方向付けを行うことである。モニタリングでは、利用者の生活状況の把握を通じた、支援計画の実施状況、支援目標の達成度、ニーズの充足度、新しい問題やニーズの発見をとおして、支援過程が見直される。ここで特に見直す必要がなければ評価・終結の局面へと進む。評価・終結の局面は、支援過程における達成目標の意味を明確に支援方法が目標達成に有効に働いていたかという支援方法の分析が行われる局面である。モニタリングの結果から終結を意識したときに評価が用いられるため評価と終結はひとつの局面として位置づけられている[37]。

これらの局面に共通する機能は、利用者の生活状況の情報を収集し、その情報をもとにした支援の方向付けが行われることである。これは、ソーシャルワークの支援過程において、利用者の生活が、どのような状況にあるのか、どのような意味を持つかという価値判断が行われていると考えられる。生活の質の把握は、ソーシャルワークにおける利用者の生活情報の収集と支援過程へ方向付

けにおいて意味を持つものと考えられる。

利用者による生活評価

生活の質の評価においては、生活主体の主観が前提とされなければならない。これは生活主体を尊重するという点において、ソーシャルワークの支援がもつ価値と一致する。利用者中心の支援は、ソーシャルワークの基礎的概念であり、特性である[38)]。ソーシャルワーカーの支援方法のひとつであるケースワークの「case」には、特殊な状況に生活する利用者を個別化することにソーシャルワークの特徴がある事を物語っている。また、生活を人と環境の交互作用としてとらえようとするソーシャルワークにおいて、環境との交互作用の中心は利用者である。ソーシャルワークにおける環境への働きかけは利用者を基点にして行わなければならない。そして、ソーシャルワークにおいて、利用者は、環境との交互作用を通じて成長・発達する存在であり、問題解決は利用者自らが行うものであると考えられる[39)]。このようにソーシャルワークの支援は、利用者を中心として展開していくものであり、ソーシャルワークにおける生活の質の評価も、利用者が中心となって行われなければならない。

利用者とソーシャルワーカーとの協働

利用者が中心となり、利用者の主観を尊重して行われる生活の質の評価に、ソーシャルワーカーはどのように関わっていけばよいのだろうか。生活の質では、主観的評価と客観的評価とを併せて評価が行われなければならない。主観的な評価とは生活主体の生活への認識や評価である。つまりソーシャルワークにおける生活主体は利用者であり、生活の質の把握では利用者の主観が尊重されなければならない。一方、評価に対して客観的基準に則って生活を評価したものが客観的評価である。客観的基準として考えられるのが、数値化された平均や水準と、社会的な合意に基づく水準や規範などである。ソーシャルワークにおいて、利用者の生活を評価する際、数値化された平均や水準を直接的に用いる必要はないと考える。収入金額が平均金額以下であるから貧しい、平均を大きく上回っているからといって豊かであると決定されるものではなく、ソーシャルワークにおける利用者の生活は利用者固有であり、数値化された平均や水準によって絶対的に判断されるものではないからである。それでは、ソーシャルワークにおいて利用者の主観的な基準以外をもって、生活を評価することにどのような意味があるのか。フェルスとペリィは、生活の質における満足感は、社会における一般的にも劣るものであってはならないとしている。しかし、生活主体が一般の生活水準の分布上で、好ましくない条件のなかにいたとしても、その生活に慣れると満足を表明してしまう場合があるとして、生活の質は、生活主体の主観的な満足だけではなく一般的水準によって計られる必要があることを述べている[40)]。ソーシャルワーカーはこのような場合において、社会的合意における水準や規範を利用者に示す役割があるのではないだろうか。ソーシャルワークにおける生活の質の評価では、利用者の主観とともにソーシャルワーカーの持つ専門性を通じた評価が必要となる。

3．ソーシャルワークにおける生活の質の定義

これまでの考察を踏まえ、筆者は「ソーシャルワークにおける生活の質とは、支援展開のために、利用者とソーシャルワーカーが協働し、人と環境の交互作用から成る利用者の生活の多領域を、時系列で評価したものである」と定義する。

ソーシャルワークにおいて生活の質を把握する目的は、支援を展開するための、利用者の生活情報の収集と、それらの支援過程における意味の認識、それらに基づく支援の方向付けである。そして生活の質を評価する主体は、利用者とソーシャルワーカーである。生活の質の評価は、利用者の生活主体としての視点と、ソーシャルワーカーの専門的視点との両方から、それぞれの視点を互いに理解したうえで行われなければならない。生活への視野は生活全体にあり、それは生活を多くの領域から評価することによって具体化される。そして生活を時系列で評価することから、生活の変容をとらえることによって人と環境の交互作用の様子を把握しようとする。

Ⅳ　ソーシャルワークにおける生活の質評価の課題と方法

1．ソーシャルワークにおける生活の質評価の課題

ジョンソン（Johnson, F. A.）は、1981年に行われた筑波会議のシンポジウムにおいて、生活の質には、概念化―評価―計画―実施という過程が必要であるとし、「まず概念がはっきりと定義づけられ、そして、それを評価するための手段が確保でき、そして、計画・立案する人のコンセンサスが決定しうるのであれば、次にどのように実行しうるかを考えなければならない」と述べている[41]。これは高度経済成長後の環境資源の問題に関連して、人間の生活様式や思考様式の改革を議論するなかで述べられたものである。しかし、この「概念化―評価―計画―実施」という流れは、ソーシャルワークにおける生活の質にも当てはまる。ソーシャルワークにおいても、生活の質の概念が定義づけられ、その定義に則った評価の手段が確保されなければならない。そしてソーシャルワーカーと利用者のコンセンサスを得て、生活を向上させるための支援が展開されるのである。本稿ではこれまでにソーシャルワークにおける生活の質の概念について考察を行い、生活の質の定義を行った。ソーシャルワークにおける生活の質の向上を研究する上での次の課題は、評価手段の確保である。

ソーシャルワークにおける生活の質評価は、生活の全体を把握することを前提とし、それは生活の多く領域を評価することで具体化される。そこで、ソーシャルワークにおいて、生活の質を評価するための把握対象となる生活領域の選択が必要となる。この生活領域の選択には、ソーシャルワークにおける生活概念が反映されていなければならない。つまり人と環境からなる生活を多くの要素に分解することから生活領域を決定することが必要である。また、生活領域の選択では、要素の羅列ではなく体系的に生活の要素を選択していくことが生活全体の把握に繋がると考える。

ソーシャルワークにおける生活の質の評価の目的は、支援を展開するために利用者の生活情報を収集し、それらの支援過程における意味を認識し、支援を方向付けていくことである。そのために

は利用者の生活の質を生活情報として収集・整理する方法が必要になる。そのためには利用者の生活状況の認識とその状況に対する評価を把握することが必要になる。

ソーシャルワークにおける生活は人と環境の交互作用としてとらえられる。ソーシャルワークはこの交互作用に働きかけることで支援を展開していくため、利用者生活における利用者と環境との交互作用の状態を把握する必要がある。人と環境の交互作用によって、生活は日々刻々と変容する。この生活の変容をとらえることで人と環境の交互作用の様子をとらえることができる。そこで、利用者の生活状況を知るためには、利用者とソーシャルワーカーとが認識している生活状況の変容と、認識した生活状況に対する利用者とソーシャルワーカーとの評価が必要である。生活状況に対する生活主体や支援者の評価は、支援過程における環境への働きかけと関係するため、その変容状況の把握もソーシャルワークでの生活の質評価における重要な要素である。

ソーシャルワークにおける生活の質評価は利用者とソーシャルワーカーが共同して行わなければならない。そのためには利用者とソーシャルワーカーが共に、相手がどのように生活をとらえているかを理解することが必要である。利用者とソーシャルワーカーが、互いの持っている利用者の生活像を共有する方法が必要となる。

このようにソーシャルワークにおける生活の質評価にはいくかの課題があり、それは以下の4点にまとめられる。

課題①　人と環境からなる生活の体系的理解

課題②　利用者とソーシャルワーカーによる生活状況の認識と評価の把握

課題③　利用者とソーシャルワーカーに生活状況の認識と評価の変容の把握

課題④　利用者とソーシャルワーカーとが協働して行う評価方法の具体化

生活の質を評価する手段はこれらの課題に応えるものでなければならない。

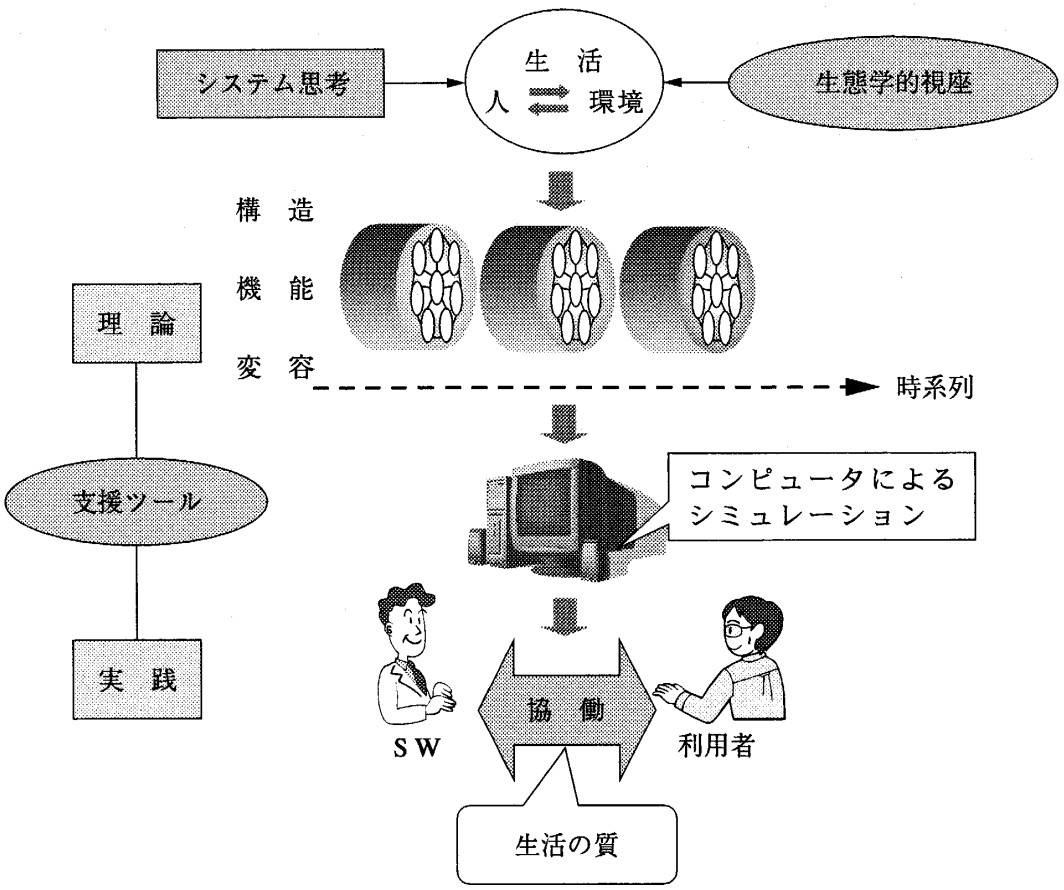
2．エコシステム構想の活用

上記のソーシャルワークにおいて生活の質を評価するための課題に応える方法として、エコシステム構想[42]がある（図3）。エコシステム構想は、生活をエコシステム的に理解する理論と、その理論をコンピュータの活用により具体化する方法とを併せ持つ構想である。

生活のエコシステム理解とは、利用者の生活をシステム思考と生態学的視座からとらえようとする生活理解の方法である。エコシステム構想では、利用者固有の生活の実体に迫るために、利用者の生活状況をひとつのシステムとしてとらえ、その複雑で固有な広がりを理解する。生活を要素や構造、関係や機能から分析し、生活の全体状況を論理的に把握するという考え方である。生活状況をシステムとしてとらえる一方で、刻々と変化する生活全体の流れを生態学的にとらえる。時間的経過のなかで利用者と利用者を取り巻く環境から生活をとらえ、その相互関係から生活全体のバランスが調和され維持されていく過程を把握する。このように生活状況をシステムとしてとらえ、生活状況の変容過程を生態学的に理解する理論が生活のエコシステム理解である。

この理論としての生活のエコシステム理解を実践に展開するものとして、コンピュータのシミュ

図3　エコシステム構想による生活の質の評価



レーションを活用した支援ツールがある。利用者の生活を細かな情報因子に分解して情報を収集し、その情報因子をコンピュータを用いてシミュレーションし、支援に必要な情報へと処理・加工する。具体的には生活を体系的に分類して作成された128の質問への回答をコンピュータに入力することで利用者の生活情報を収集・蓄積する。これによって、システム的思考による生活の理解が具体化される。また収集された情報は、コンピュータのシミュレーションによってビジュアル化される。蓄積された情報をビジュアル化することによって利用者の生活の変容を時系列で見ることができ、利用者の生活を生態学的視座からとらえることを具体化する。

エコシステム構想では、生活をシステムとして理解し、その生活システムに関する多くの情報を整理・分析し蓄積できる。これは、第一番目の課題である生活を多次元的にとらえるための生活の体系的理解の方法を提供し、その体系的な生活理解をコンピュータを使って具体化することにより、第二番目の課題である利用者の　生活状況と評価の把握を可能にする。また、収集した情報をコンピュータのシミュレーションを活用してビジュアル化することによって、生活の変容を時系列で表示することができる。このことは、第三番目の課題である生活状況と評価の変容の把握を可能にする。そして生活がビジュアル化されることによって、利用者とソーシャルワーカーとが目に見える形で情報を共有することができ、協働のためのコミュニケーションの素材となる。このことは第四番目の課題である利用者とソーシャルワーカーとの協働の具体化に繋がる。これらのことから、エコシステム構想は、ソーシャルワークにおける生活の質の評価の理論と具体的方法とを提供するも

のであると言える。

3．支援ツール開発への課題

生活の質の評価をさらに具体化していくためには、生活の質の評価を目的とした質問内容をもつ支援ツールの開発が必要である。そのためにはまず、生活の質を把握するための生活の領域を決定しなければならない。エコシステム構想に基づくこれまでの支援ツールでは、把握対象となる生活領域を人と環境との2領域に分け、さらに人を当事者と基盤に、環境を周辺と支援の4分野に分割している。そして当事者を特性と問題に分け、基盤は身辺と家族に分けている。周辺は近辺と資源に、支援は機関とネットワークに分けられている。そして、この特性、問題、身辺、家族、近辺、資源、機関、ネットワークの8つの構成要素をさらに4つの内容に分けて、生活を32の項目から把握しようとしている[43)]。生活の質を評価するためには、この32の項目を生活の質の観点から見直し、生活の質を把握するための生活領域を選択する。そのためには、人と環境から成る生活の、「人」にはどのような要素が含まれるのか、あるいは「環境」には何が含まれるのかを検討することが課題となる。この課題を解決するためには、ソーシャルワーク理論における人と環境の具体的内容の考察と、他の研究領域での生活の質を評価するツールにおいて、生活の質を把握する対象にどのような生活領域が選択されているのかを検討する必要がある。

これまでの支援ツールでは生活の32項目のそれぞれに対して、関心や姿勢などの価値について質問、生活状況の理解などの知識についての質問、計画や見通しなどの方策についての質問、対応や取組などの方法についての4つの質問が用意されている。この価値・知識・方策・方法に対応する、生活の質を把握するような質問内容の検討も必要になる。

生活の質を評価する支援ツールを開発するためには、生活領域の選択と、それに対して何を訊ねるのかという質問の要素を検討することが今後の課題となる。

V　おわりに

本稿では、ソーシャルワークにおける生活の質の概念を考察してきた。「Ⅱ生活の質の概念」では、老年学の研究者であるロートンの生活の質の定義をめぐる6つのキーワード、①多次元的、②評価、③個人に内在する基準、④社会―規範的基準、⑤人―環境システム、⑥時間性を中心にして生活の質の概念を考察した。「Ⅲソーシャルワークと生活の質」では、6つのキーワードをソーシャルワークの側面から考察し、ソーシャルワークにおける生活の質の概念を整理した。そして、その考察に基づいてソーシャルワークにおける生活の質を定義した。「Ⅳソーシャルワークにおける生活の質評価の課題と方法」では、ソーシャルワークにおける生活の質研究の次なる課題として、生活の質評価の手段の確保を挙げ、そのための課題を4点に整理した。そしてこれら4点の課題に応える方法として、生活理解の理論と支援ツールによる実践方法を併せもつエコシステム構想を提示した。最後にこのエコシステム構想に依拠して生活の質を評価するための、生活の質を評価することを目

的とした支援ツールの課題を検討した。

今後もソーシャルワークにおける生活の質を継続的に研究し、エコシステム構想に基づいた生活の質を向上させる支援方法を検討していきたい。そのためにはまず、生活の質の評価を具体的に展開するために、生活の質を評価する支援ツールの開発に取り組もうと考えている。

【注】

1) Lawton, M. P. Multidimensional View of Quality of Life in Frail Elders, Birren, J. E. eds. The Concept and Measurement of Quality of Life in the Frail Elderly, Academic Press, 1991, p. 6.
2) *ibid.*, p. 7.
3) *ibid.*, p. 6.
4) *ibid.*, p. 6.
5) *ibid.*, p. 6.
6) 上田敏『リハビリテーションを考える』青木書店　1983年　45—48頁。
7) Lawton, M. P. (1991), *op. cit.*, p. 6.
8) Lawton, M. P. (1991), *op. cit.*, p. 7-11.
9) 田崎美弥子・中根允文『WHO/QOL—26の手引き』金子書房　2001年　8—9頁。
10) Lawton, M. P. (1991), *op. cit.*, p. 7.
11) 荻原勝「欧米先進社会におけるクオリティ・オブ・ライフの研究」『国民生活研究』17（4）1978年　3頁。
12) 松本洸「2章　クオリティ・オブ・ライフの指標化と分析法」金子勇・松本洸編著『クオリティ・オブ・ライフ—現代社会を知る』福村出版　1986年　29—56頁。
13) Lawton, M. P. (1991), *op. cit.*, p. 7.
14) Lawton, M. P. (1991), *op. cit.*, p. 7.
15) 森俊太「第Ⅰ部第3章　日常生活と生きがいの関係」高橋勇悦・和田修一編著『生きがいの社会学—高齢化社会における幸福とは何か』弘文堂　2001年　100—101頁。
16) Lawton, M. P. (1991), *op. cit.*, p. 6.
17) 三重野卓「『生活の質』の論理とその展開—社会指標の構築から『生命』をめぐる数量化へ」『社会政策研究』3　2002年　9頁。
18) Lawton, M. P. (1991), *op. cit.*, p. 7-11.
19) 杉澤秀博「高齢者のクオリティ・オブ・ライフ研究をめぐる論点」『社会政策研究』3　2002年　56—62頁。
20) Lawton, M. P. (1991), *op. cit.*, p. 11.
21) Cummins, R. A. Assessing quality of life, Brown, I. R. ed. *Quality of Life for People with Disabilities,* Nelson Thornes Publishers, 1997, p. 118.（中園康夫・末光茂監訳『障害をもつ人に

とっての生活の質』相川書房　2002年　132—133頁。）

22) Lawton, M. P. (1991), *op. cit.,* p. 7.

23) Felce, D. and Perry, J. Quality of life: the Scope of the term and its breadth of measurement, Brown, I. R. ed. *Quality of Life for People with Disabilities,* Nelson Thornes Publishers, 1997, p. 62-63.（中園康夫・末光茂監訳『障害をもつ人にとっての生活の質』相川書房　2002年　70—71頁。）

24) *ibid.,* p. 62.（同書　69頁。）

25) Lawton, M. P. (1991), *op. cit.,* p. 11-12.

26) *ibid.,* p. 12.

27) 太田義弘『ソーシャル・ワーク実践とエコシステム』誠信書房　1992年　149頁。

28) 同書　149頁。

29) この図表は第21回国際社会事業学校連盟（イギリス・ブライトン、1983年）においてジャーメインが発表の資料として用いたものであるが、本稿では以下の文献を参照した。

①久保紘章「ライフ・モデル」武田建・荒川義子編著『臨床ケースワーク』川島書店　1986年　144頁。

②丸山裕子「エコロジカルアプローチ」黒木保博・山辺朗子・倉石哲也編著『福祉キーワードシリーズ　ソーシャルワーク』中央法規　2002年　13頁。

30) 久保紘章「ライフ・モデル」武田建・荒川義子編著『臨床ケースワーク』川島書店　1986年　139—140頁。

31) Germain, C. B. The ecological approach to people-environment transaction, *Social Casework,* 61 (6), 1981.（＝松本紀子訳「第6章　人と環境の交互作用」小島蓉子編著『エコロジカル・ソーシャルワーク—カレル・ジャーメイン名論文集』学苑社　1992年　121—122頁。）

32) Germain, C. B. Time: an ecological variable in social practice, *Social Casework,* 57 (7), 1976.（＝斉藤順子訳「第2章　時間—ソーシャルワーク実践の生態学的な変数」小島蓉子編著『エコロジカル・ソーシャルワーク—カレル・ジャーメイン名論文集』学苑社　1992年　38頁。）

33) 同書38頁。

34) 同書38頁。

35) Lawton, M. P. (1991), *op. cit.,* p. 7.

36) 中村佐織『ソーシャルワーク・アセスメント—コンピュータ教育支援ツールの研究』相川書房　2002年　98—102頁。

37) 同書　102頁。

38) 太田義弘　前掲書　56頁。

39) 同書　56—57頁。

40) Felce, D. and Perry, J. (1997), *op. cit.,* p. 62.

41) 島田一男「第2章　クオリティ・オブ・ライフの改善に向けて」都留重人編著『クオリティ・

ライフ―筑波会議報告』弘文堂　1983年　148―150頁。

42) エコシステム構想と支援ツールの詳細については以下の文献を参照されたい。

①太田義弘『ソーシャル・ワーク実践とエコシステム』誠信書房　1992年。

②太田義弘「ソーシャルワーク支援への科学と構想」『龍谷大学社会部学紀要』(21) 2002年。

③太田義弘「ソーシャルワークの臨床的展開とエコシステム構想」『龍谷大学社会学部紀要』(22) 2003年。

43) 太田義弘「ソーシャルワークの臨床的展開とエコシステム構想」『龍谷大学社会学部紀要』(22) 2003年　7頁。